

「主の日を準備する者」井上隆晶牧師

マラキ書 3 章 19～24 節、ルカ福音書 1 章 5～20 節

①【律法を守ることと信仰とは別であること】

今日から待降節に入ります。クリスマス物語に最初に登場するのは、洗礼者ヨハネの両親である祭司ザカリアとその妻エリサベト夫婦です。彼らは神の前に正しい人で、主の掟と定めをすべて守り、非のうちどころのない信仰者でした。しかし二人には子供がなく、二人とも既に歳をとっていました。ザカリアが神殿の聖所で香を炊いているとき大天使ガブリエルが現れ、子供が与えられることを告げられますが、ザカリアはそれを信じられず、口が利けなくなります。いくら正しく、非のうちどころのない人でも、神の業を信じることはできませんでした。これは律法の限界というものを教えているのです。律法を守ることと、信仰とは別なのです。この世の中には正しい生活をする人が大勢いますが、だからといって皆がキリストや神を信じているかということそうではありません。信じるとは人間の力を超えたことなのです。ザカリアが口を利けなくなったのは、神の業に対して人間は口出しすることも、手出しすることも出来ないということを教えています。

②【準備をすることの大切さ】

洗礼者ヨハネという人物は、イエス様が現れる前に、準備の出来た民を用意する者として神から遣わされました。旧約聖書のマラキ書で預言され、母親の胎内にいる時から聖霊に満たされ、使命を受けて生まれてきた人物です。イエス様とは親戚にあたり、イエス様より 6 か月年上になります。彼の使命についてはこう書かれています。「イスラエルの多くの子らをその神である主のもとに立ち帰らせる。彼はエリヤの霊と力で主に先立って行き、父の心を子に向かわせ、逆らう者に正しい人のふんべつを持たせて、準備のできた民を主のために用意する。」（ルカ 1：16～17）

マラキ書ではこう預言されています。「見よ、わたしは大いなる恐るべき主の日が来る前に、預言者エリヤをあなたたちに遣わす。彼は父の心を子に、子の心を父に向けさせる。わたしが来て、破滅をもって、この地を撃つことがないように。」

（マラキ 3：23）ここでは預言者エリヤと書かれていますが、これが洗礼者ヨハネのことです。顔かたちは違いますが、エリヤと同じ霊と力を持つ預言者だからです。「大いなる恐るべき主の日」とは、神がこの世界の中に入って来られる日のことです。それは「破滅をもって、この地を撃つ」とあるように、裁きの日であって最後の審判の日です。キリストは最初にこの世に来られた時、人の罪を負うために弱い者として来ました。しかし再び来られる時には、強い者としてすべての人を裁くために来られます。私たちは主の日が来る前に、準備をしなければな

らないのです。これが待降節の意味です。洗礼者ヨハネが伝えた準備とは、悔い改めでした。彼はこう説教しました。「悔い改めにふさわしい実を結べ。我々の父はアブラハムだなどという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」

(ルカ 3:8~9) ひとことで言うなら、自分は特別だと思ふな。悔い改めにふさわしい実を結べ、ということです。

③【実を結ばないクリスチャン】

先日読んだヨハネの福音者にこう書かれていました。「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。」(ヨハネ 15:1~2) イエス様はまことのぶどうの木であり、父なる神は農夫です。イエス様につながるとは洗礼を受け、教会に来て礼拝をし、聖餐に与ることです。イエス様に「つながっていながら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる」とあります。ここにはっきりと、つながることが目的ではなく、実を結ぶことが信仰生活の目的であると書かれています。洗礼を受け、礼拝に来るのは実を結ぶための手段です。実とは何でしょう。聖霊による実とは第一にイエス様を主と告白することですが、その他に「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」(ガラテヤ 5:22~23) です。それはひとことで言うならキリストに似た者になるということでしょう。

では洗礼を受け、礼拝をしているのに実を結ばないのはなぜでしょう。それは「わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている。」(4、5) とあるように、実を結ぶためには、私とキリストの両者の意志の協力と働きが必要なのに、それが一方的になっているからです。

●昔ある信徒の方が私に「神に祈っても、何もしてくれなかった」と言いました。私はそれを聞いて思いました。「何もしてくれないって、私の罪を負って十字架にかかって死に、復活して死なない命をくださったではないか」と思いました。その方は自分の罪が見えていないのではないのでしょうか。ですからキリストの十字架が少しも有り難くないのです。その方は罪の赦しや永遠の命よりも、自分の願いをかなえてもらいたいのです。分からないではないですが、私たちの願望がかなえられるのは限界があります。キリストには罪の赦しと永遠の命以上のものを求め過ぎるものではないと思います。その方は願いをかなえてくれない神に対して恨みを持っているように感じました。これはユダヤ人と同じであり、十字架の左の強盗と同じです。苦しみを周りの人や、キリストのせいにし、決して自分の罪が原因だとは思わないのです。

彼だけでなく、そのようなクリスチャンを何人か知っています。彼らは自分の願いがかなわないと、力づくで手に入れようとします。それがプーチンのようなクリスチャンです。洗礼も受け、礼拝もするでしょうが、聖霊を持たない信者です。

キリストの愛が分からず、自分が認められ、自分の願いがかなう事しか考えていません。彼らはやがて公の礼拝から遠ざかるようになるでしょう。そのような人物が、もし教会の指導者になったとしたら大変です。教会は混乱し、信徒は散るでしょう。彼らは自分の欲望のために神を利用しているのです。このような信徒のことをヤコブはこういいました。「あなたがたは、欲しても得られず、人を殺します。また熱望しても手に入れることができず、争ったり戦ったりします。得られないのは、願い求めないからで、願い求めても、与えられないのは、自分の楽しみのために使おうと、間違った動機で願い求めるからです。」(ヤコブ 4:2~3) 私たちは恨みを持つキリスト教徒のために、彼らが神の愛が分かる人になるように祈らなければなりません。

④【実を結ぶために必要なこと】

信仰生活をしていても実を結ばない人というのは、ちっとも変わらない人ということです。そのような人は「自分は変わらなくても良い」と思っているのです。だから変わらないし、求めないのです。まず「変わりたい」という意志を持ち、キリストにそれを願い続けなければなりません。病気でもアルコール依存症でもそうですが「本人が治りたい」と思わない限り、いくら医者や周りの家族や友人が助けようとしても治らないのです。38年間ベトザタの池で寝たきりの病人にイエス様は「良くなりたいか」と聞かれました。それと同じです。

●心なごむ会に出席されている O さんという方がいます。この方は、今度洗礼を受けられるそうなのですが、毎回、その口から出る言葉に感心します。彼女の夫は精神障害をもっていました。が医者にかからず、暴力と暴言を吐いて、家族を苦しめ続けました。夫はやがて亡くなりますが、その後、彼女は精神障害について勉強するようになり、自分が悪かったと思うようになります。彼女はつらい経験から意味を学ぼうとし、決して人のせいにならず、自分を一生懸命変えようとしているのが分かります。そしてそのような人は、見ていて清々しく、周りの人を励まします。カルト宗教から脱会して洗礼を受け、キリスト教徒になろうとする人々も勇気を与えてくれました。変わろうと努力する人は美しく、神の霊がその人に働きます。だから実を結ぶのです。

救い主キリストを迎えるための準備とは何でしょう。悔い改めとは何でしょう。悪いことをやめるといった、この世の道徳的なことではないのです。やめられるくらいなら、神の子の十字架は必要ないのです。悔い改めるとは、自分の無力さを認め、救い主を必要とする心です。自分は変わる必要があり、変わらなければならないという、悔いし砕けた魂です。そのような心の準備こそ最も、神様に喜ばれる準備なのです。この待降節の時「自分は変わりたい」「自分は良くなりたいたい」と強く願うこと、そしてそれを祈り続けるようにしましょう。